

南アルプスに設置した防鹿柵の効果

鵜飼 一博 (NPO 法人日本高山植物保護協会／静岡県立農林環境専門職大学短期大学部)

南アルプスの静岡県側のお花畑において、1998～1999年(平成10～11年)時点では、聖平のニッコウキスゲ群落は消失していたが、その他の地域では1979～1980年(昭和54～55年)とほとんど変わらぬ姿のお花畑が存在していた。

しかし、2005年(平成17年)においては、北荒川岳から茶臼岳に至る稜線上的なお花畑のほとんどは、ニホンジカの採食影響を受けており、ホソバトリカブト、バイケイソウ、マルバダケブキ等の不嗜好植物以外はほとんど採食され、ゴルフ場のグリーンと同様な景観が広がっている箇所も散見された。

静岡県は、2002年(平成14年)に聖平に試験的な防鹿柵を設置し、その後、三伏峠、茶臼小屋周辺、荒川小屋周辺、本谷山にも防鹿柵を設置している。

防鹿柵いわゆる植生保護施設の目的はニホンジカの侵入をいかに防ぐことができるかであるが、資材が限定されるなどの条件の中で、約20年間防鹿柵の新設・維持管理を行ってきた。これらの作業から得られた経験則や防鹿柵の効果つまり植生回復状況を紹介する。



平成14年9月



令和5年7月

写真1 聖平における防鹿柵設置前の植生状況と設置後の回復状況



平成17年7月



令和4年7月

写真2 三伏峠における防鹿柵設置前の植生状況と設置後の回復状況